

第 6 章

さらなる授業改善に向けて

豊かな授業をめざして

—山形大学による授業改善の取り組み—



TOPICS

- ◆ [平成21年度・前期・授業評価アンケート結果を公開しました。](#)
- ◆ [第11回山形大学教員研修会教養教育ワークショップが開催されました。](#)

■ 新しいウィンドウが開きます

- 教養教育改善充実特別事業スケジュール
- 教養教育FD合宿セミナー in 山形大学 蔵王山寮
- 教養教育ワークショップ
- 公開授業・公開検討会
- ミニ公開授業・検討会
- 授業改善アンケート
- ベストティーチャー賞
- 「あっとおどろく授業改善」(授業改善の冊子・紹介ビデオ)
- 授業改善リレーエッセイ
- シンポジウム
- 新しい授業プログラムの試み
- e-learningドイツ語講座
- 教養教育改善充実特別事業報告書
- 教育改革のためのリンク集
- 相談窓口

第 6 章 さらなる授業改善に向けて

教養教育改善充実特別事業作業班

小田 隆治

平成 21 年度に山形大学が行った新規のFDの中で、世の中に最も注目されたものとして、授業改善を目的としたビデオ教材の作成がある。授業改善の教材として一般的なものには書籍がある。しかし、映像の時代として動画による教材があってもしかるべきであると常々考えていた。もちろんすでに授業をすべて収録し、それを授業改善に活用している試みは全国のいくつかの大学にある。岩手大学や神奈川工科大学のように全国の大学の授業を収録して回っているところもある。こうしたものは授業改善のための有効な手段として広く活用されるようになっていくであろう。それに加えて、アーカイブ化することによって、将来、この時代の高等教育の実態を示す資料として有効に活用されるようになるかも知れない。

しかしながら、授業改善のために研究室にこもって他の教員の授業を 90 分間も見ると気にはなかなかないのではなかろうか。ましてや、何度も見るように、と言われたら閉口してしまう。研究の対象とするならば別だが、そうした教員はごくわずかなはずである。

我々は授業改善に役立つビデオ版のティップス集を作ることと決断した。教育GPに採択されたおかげでビデオ編集のできるスタッフを採用することができたからだ。このスタッフの力を借りて、これまで構想をあたためてきたビデオ教材を作成することにした。

制作方針は、誰にも気軽に見てもらえ、授業改善に資するものであることだ。このことを具体化するため、ユーモア感覚にあふれた子気味のいい短編集を作ることにした。そしてそれらはすべて我々教員がシナリオを書き演じるのだ。決して授業の実写はない。こうして高等教育研究企画センターの客員教員をしていただいている他大学の教員3名と我々2名の教員と一緒に制作した。完成したビデオの名称は『あっとおどろく大学授業NG集』である。出来上がったものは、本学のホームページで見ることができる。サーバーの容量の都合で週代わりとなっている。

このビデオは、読売新聞の社会面に大々的に紹介され、Yahoo Japan のトップページに載った。NHKで山形県内から全国版へ、そしてNHKワールドによって世界中に流された。反響は我々の予想をはるかに超えるものだった。全国のテレビ局からビデオの貸し出しの依頼が筆者の元に殺到した。あまりの反響の大きさにびっくりし、こちらの想定していなかった方向にこのビデオが利用されることを懸念し、当初予定していたビデオの配布を急遽取り止めた。それでも全国の大学や高校から、ビデオの頒布や貸し出しの求めが相次いだ。我々はこのビデオを制作した5名の教員いずれかを講師としたFD講演会だけに上映を許可することにした。我々としてもこのビデオの教材としてのより良い活用法を研究しているところである。

時流に乗らず、それでいて萎縮せず、ビデオ教材の可能性を追求して行こうと考えた。東日本の 42 大学・短大・高専からなる大学間連携FD組織「FDネットワーク“つばさ”」の平成 21 年度の事業の一つとして大学間連携SD研修会を行うことが、春の協議会で決定した。そこでこの研修会でSD版のビデオ教材「あっとおどろく大学事務NG集」を制作することにした。大学の教育改革や改善には事務職員の力が求められているということは自明のこととなっている。

最初に“つばさ”に、それから全国の高等教育機関に募集をかけた。我々の予想をはるかに超える人たちが参加を希望してきた。当初 30 名の定員を 40 名に増やしたが、それでも多くの大学に断りを入れざるを得なかった。北海道から九州までの 30 の高等教育機関から 40 名の参加者があった。高等教育機関の中には、我々が当初から射程に入れていた小さな大学や短大・高専はもとより、東京大学や東北大学、大阪大学などの旧帝国大学からも事務職員を送り出してきた。我々はその反響の大きさに驚いた。

SD版のビデオ教材は丸一日の研修で収録し、その後高等教育研究企画センターで編集を行い、12 月には完成した。このビデオは各大学で事務職員の能力開発に活用してもらうために、SD研修会に参加者した全員に送付した。また、全国の大学から借用の願いがあり、本センターはそれに応えている。SD版のビデオは本学のホームページでご覧いただくこともできる。

FD版のビデオは、講義型だけでなく少人数のセミナー版についても作成して欲しいという要望を様々なところから聞くようになった。そのため「あっとおどろく大学授業NG集」と同じメンバーで学生主体型授業のビデオ教材を作成することにした。このビデオ教材のタイトルは「学生主体型授業へのアプローチ」というタイトルになっている。このビデオの特徴は、NG場面の次にGoodの場面をつけたことにある。このビデオはDVDにおおとして、学内の全教員と全国の大学・短大・高専に配布する予定である。Goodの場面があることによって授業の具体的な改善に役立つ、との言葉をいただいている。学内はもとより全国の高等教育機関で広く活用していただければ幸いである。しかし、このビデオは学生主体型授業と銘打ちながらも、グループ学習に主眼を置いている。そこはご理解いただきたい。

教育GPに採択された学生主体型授業については、2年目の今年はパイロット授業を展開し、研究を深めた。この成果もホームページを参考にさせていただきたい。また、学生主体型授業の設計については、平成 22 年春に出版予定の『学生主体型授業の冒険(仮)』(ナカニシヤ出版)を参考にさせていただきたい。全国の多くの実践が載っていて、授業のデザインに役立つはずである。

山形大学が進めてきた公開・共有化に基づいたFDは、平成 11 年から現在まで続いてきた。現代の重要なキー概念となっている sustainable development の sustainability

は本学のFDで十分に担保されている。そしてそれは上記のFD教材の開発や学生主体型授業FDプロジェクトなどを通して発展もしている。“つばさ”を通して、他大学のFDの構築にも寄与できている。

これからは、教育改善や授業改善のために各学部や学科、コース内の教員の定期的な話し合いが必要となってくるであろう。学生の雰囲気は毎年変わっている。その学生の置かれている状況を教員の間で組織的に把握し、対処することが求められている。一人の教員がいくら熱心に一人の学生を相手にしても、問題は解決しないかもしれないのだ。

学士課程教育で問われていることは、primitive とも言える教員たちの日常的な話し合いにあるのではなかろうか。私にはこうした営為が教育を改善していくための組織的取組であると思える。

もちろん、学部や学科、コースに閉じないことも必要である。我々は有益な情報ならばどこからでも入れる開放性を持っていなければならないし、自身の情報も公開し、広く活用してもらいようにすることが大切なことであろう。

教育改善のためには、教員や組織間の相互研鑽を柱としつつ、公開と共有化を推進していく必要がある。